

嫉妬の女神

～ハプニングバーで出会った彼女は、僕の苦しむ顔を見ることで悦ぶ淫乱な女でした～

序章：暗がりの中の熱

新宿の雑居ビルの五階。「CINEMA」という小さな看板が赤い照明で浮かび上がっている。入り口らしくない重い扉を押すと、薄暗い空間が広がった。店内は映画館を思わせる造りで、奥の壁一面に投影された古いフィルムの映像が、来た客のシルエットを青白く照らしている。

桐生蓮(きりゅう れん)は、同僚の土方に無理やり引っ張られてここに来ていた。

「結婚する前に、もう一回遊びたくてさ。蓮も一緒に来いよ、一人じゃ入りにくいんだ」

土方は既に酔っていて、カウンターで女将風の女性と楽しそうに話している。蓮は入口近くのハイテーブルに立ち、グラスに注がれたウイスキーの琥珀色に視線を落としていた。

二十四歳。IT企業でプログラマーをしている。恋人はおらず、女遊びも滅多にない。こういう場所——ハプニングバーと呼ばれる類のスポット——に足を踏み入れるのは人生で初めてのことだった。

「初めて？」

不意に隣から聞こえた声に、蓮は顔を上げた。

女性が一人で座っていた。黒のキャミソールに、薄手のカーデガン。髪は肩につくかつかない長さで、照明の具合で色は定かではなかったが、明るめのトーンのはずだ。目尻が少し下がった猫目で、口元には嘲るような——いや、親しみを含んだ笑みが浮かんでいる。

「……見えますか」

「見え見え。目が泳いでるもん」

女性は蓮の隣に移動し、グラスを置く。バーテンダーに何かを注文し、蓮に向き直った。

「私、明里。——名字は秘密にしとく」

「桐生です。蓮と言います」

「蓮くん。いい名前」

明里は大胆にも蓮の肩に手を回し、体を預けてくる。甘く微かな香水の香り。蓮は思わず身硬くなった。

「ここ、初めてなら慌てないで。飲もう、ただ飲むだけ。それで十分楽しいから」

その時、奥のカーテンが開き、一組の男女が出てくるのが見えた。男は上着を脱いで肩にかけ、女は乱れた髪を指で梳きながら笑っている。何があったのかは想像に難くない。蓮は慌てて視線を逸らす。

「気になる？」

明里が耳元で囁く。熱い吐息が首筋に触れる。

「別に……」

「嘘。結構見てた。蓮くん、真面目そうだから、そういうの興味あるんでしょ？ 見るのは好きなタイプ？」

蓮は反論できない。確かに好奇心はあった。だが同時に、ここが自分の居場所ではないという感覚も強くあった。

「大丈夫、誰も強要とかしないから」明里は優しく言った。「ここは変なルールないの。自分から望んで来た人だけが、あそこに入る。強要も、義務もない。——だから、酒を飲んでくつろぐだけでもいいんだよ」

明里の言葉に、蓮は少しだけ肩の力を抜く。明里はそれを見て微笑み、自分のグラスを掲げた。

「乾杯。新しい世界の入り口で」

蓮もグラスを上げる。乾杯の音が、店内の重低音のBGMに混ざって消えていく。

その後、二人は三時間ほど話した。明里は二十二歳。フリーランスでグラフィックデザインをしているらしい。ここには「ストレス発散」に月に二、三回来ることが多いと話す。恋人はいない。「縛られるの嫌いな」。

「蓮くんだって、そんなに縛られたいタイプには見えないけど」

明里は蓮の腕を軽くつねった。

「自分でもよくわかんないですね。一人でいるのに慣れすぎて」

「そういう人、多いよ。蓮くんみたいに。——で、今日はあの奥のカーテン、覗いてみる？」

明里は尖った顎を奥へと向ける。プレイルールの入り口。赤いベルベットのカーテンが揺れている。

蓮は喉が乾くのを感じた。明里の視線が、挑むように、しかし優しく彼を見つめている。

「……今日は、また今度で」

蓮はそう言った。明里は可笑しそうに笑い、頷く。

「わかった。じゃあ、店を出るまで付き合っただけあげる。蓮くん、まだ終電あるでしょ？」

二人は店を出た。新宿の夜は朝に近づきつつあった。歌舞伎町のネオンが薄い空に滲む。明里は蓮の隣を並んで歩き、時折、わざと肩をぶつけてくる。

「電話、交換しとく？」

明里がスマートフォンを差し出す。蓮は二秒だけ迷ってから、自分の番号を伝えた。

明里が小走りで交差点を渡り、タクシーに乗るのを見送ってから、蓮は自分の胸の高鳴りに気づく。

まだ誰とも寝ていない。何も始まっていない。だが、蓮は直感的に理解していた——この女と、自分とは何か始まる。そしてそれは、自分が知っている「何か」とは全く違う形をしたものだろうと。

終電の車内で、蓮は窓に映る自分の顔を見た。眠くない。胸の奥が、疼くように熱い。

スマートフォンを開く。明里から既にメッセージが届いていた。

『今日はありがとう。楽しかった。また来てね、CINEMAに。——あかり』

蓮は、何度か読み返してから、画面を閉じた。

夜の中で、何かが確実に動き始めていた。

第一章：距離の縮まり方

あの夜から一週間。

蓮の日常は何も変わっていないはずだった。朝起きてコーヒーを淹れ、満員電車で揺られ、デスクに向かい、画面上のバグと格闘する。しかし、蓮の中で何かが決定的に変わっていた。頭の片隅に、いつも「CINEMA」の薄暗い空気と、明里の香水の残り香が纏わりついてた。

仕事が終わった金曜の夜、蓮は迷わず新宿へ向かった。雑居ビルのエレベーターを上がり、あの入り口らしくない扉を押す。

店内は相変わらずの薄暗さだった。赤い照明に照らされたバーカウンターを見る。いた。明里が今日も一人でグラスを傾けている。

「……明里さん」

声をかけると、明里はゆっくりと振り向き、目を細めて笑った。

「蓮くん。来てくれたんだ」

何の約束もしていなかったのに、まるで待っていたかのような口調。蓮は隣の席に座り、ビールを注文する。

「約束したでしょ。また来てねって」

明里は小悪魔のように笑い、蓮の腕にそっと自分の腕を絡める。その親密さに、蓮の心臓が早鐘を打つ。

その夜、二人はカウンターから奥のスペースへと移動した。薄いパーテーションで仕切られただけの席は、隣のブースの気配が筒抜けだった。すぐ隣からは衣擦れの音と、抑えた喘ぎ声が漏れてくる。蓮は落ち着かず、視線を泳がせた。

「気にしないの。ここはそういう場所だから」

明里が蓮の膝の上に手を置く。熱い体温がジーンズ越しに伝わってくる。蓮は息を呑んだ。

「ここの空気、好きになってきた？」

耳元で囁かれ、蓮はただ頷くことしかできなかった。暗闇の中で他者の情事の気配を感じながら、明里の体温だけが自分を繋ぎ止める支えのように思えた。

二度目の再会は、それからさらに一週間後のことだった。
蓮はすっかり「CINEMA」の常連になりつつあった。その夜、明里とカウンターで飲んでいると、彼女がふと奥のカーテンの方を顎でしゃくった。

「今日、ちょっと面白いのが入ってるよ」

明里に手を引かれ、プレイルームの近くの席に移動する。赤いベルベットのカーテンが少し開いていたのだ。中を覗き込むと、見知らぬ男女が絡み合っていた。男が女の脚を開かせ、激しく腰を打ち付けている。女は甘い声を上げ、男の背中に爪を立てている。

蓮は息を呑んで目を逸らそうとしたが、体が動かなかった。目の前で繰り広げられる生々しい性。それは映像ではなく、熱気と匂いを伴う現実だった。

「どう？ 興奮する？」

明里が蓮の耳元で囁く。彼女の手が、蓮の太ももをゆっくりと撫で上げた。

「……わからない。でも、目が離せない」

「ふふ、正直だね」

明里は蓮の肩に頭を預け、カーテンの隙間を覗き込む。

「あの女の人、先週まであその男と付き合ってたのに、今日は別の男と来てるの。だからあんなにハメを外してるんだよ」

明里は他者の関係を楽しそうに解説する。蓮は、明里がこの空間をただの性欲処理の場ではなく、人間観察の場として楽しんでいることを知った。そして、そんな明里の冷徹さと奔放さに、深く惹かれていく自分を感じていた。

三度目の再会。

蓮が「CINEMA」に通い始めて一ヶ月が経っていた。蓮はすっかりこの店の空気に慣れ、明里との距離も縮まっていた。だが、その夜、蓮の心に小さな棘が刺さる出来事があった。

店に入ると、明里が見知らぬ男と楽しそうに話していた。男は明里の耳元で何かを囁き、明里は可笑しそうに笑っている。二人の距離は非常に近い。

蓮はカウンターに座り、その様子を横目で見ていた。胸の奥がチリチリと焼けるような感覚。それが嫉妬だと気づいた瞬間、蓮は居た堪れなくなりそうになった。

しばらくして男が帰ると、明里は何事もなかったかのように蓮の隣に座った。

「ごめんね、待たせちゃった？」

「……いや。知り合い？」

「ただの友達。ここではみんなそうだから」

明里はあっけらかんと言う。だが、蓮の胸のモヤモヤは晴れなかった。

「ねえ、蓮くん」

明里が真剣な目で蓮を見た。

「私のこと、もっと知りたいって言ったよね」

「ああ」

「私ね、誰かと付き合っても、他の人とも寝るかもしれない。それでも、私のこと好きでいられる？」

蓮の心臓が跳ねた。それは警告だったのかもしれない。あるいは、彼女なりの精一杯の誠実さだったのか。さっきの男との会話が頭をよぎる。それでも、蓮は迷わず答えた。

「好きです。だから、付き合ってください」

明里は目を丸くし、それからふわりと笑った。

「変な男。……いいよ。でも、私のこと縛らないでね」

その夜、二人は「CINEMA」を出て、初めてホテルへ向かった。白いシーツの上で、明里は蓮の首に腕を回し、激しく求めた。彼女の体は熱く、柔らかく、蓮を深く飲み込んでいく。蓮は夢中で彼女を抱きしめ、自分のものだと確信したかった。

しかし、翌朝。

目を覚ますと、明里は既に服を着て、鏡の前で髪を整えていた。

「おはよ。よく寝てたね」

明里の声は、昨夜の熱を感じさせないほどあっさりとしていた。

「……もう行くの？」

「うん。午後から打ち合わせあるから」

明里はバッグを手に取り、ドアノブに手をかけた。

「また店で会える？」

その言葉が、冷たい刃のように蓮の胸に突き刺さる。昨夜の激しさは何だったのか。彼女にとって、これは「遊び」の延長線上の出来事でしかないのか。

「……うん。わかった」

蓮は搾り出すように答えた。明里は「じゃあね」と手を振り、部屋を出ていく。

ドアが閉まる音。静寂が戻った部屋で、蓮はシーツに残った明里の香りを吸い込んだ。胸の奥に、チクリとするような不安が芽生える。

彼女を独占したい。その強欲な感情が、蓮の心の底で静かに、しかし確実に育ち始めていた。

第二章：見せつけられる自由

付き合い始めてから一ヶ月が経った。

蓮の生活は、以前よりも少しだけ鮮やかになった。休日は明里と街を歩き、映画を見て、美味しいものを食べる。ごく普通の恋人同士のデート。明里は蓮の腕を組み、人混みの中を楽しそうに歩く。そんな時、蓮は錯覚しそうになる。彼女は自分だけのものなのだと。

しかし、その幻想は金曜の夜になるとあっけなく崩れ去る。

「今日、行くでしょ？ CINEMA」

明里は当たり前のように言った。付き合っているのだから、もうあんな場所に行く必要はないのではないかと——そう言おうとして、蓮は言葉を飲み込んだ。明里の目は笑っていたが、その奥には「縛らないでね」という約束を守ることを強いる静かな圧力があつた。

「……うん、行くよ」

蓮が答えると、明里は子供のように喜んだ。

金曜の深夜。二人は並んで「CINEMA」のカウンターに座っていた。蓮はジン・トニックを口に運びながら、店内の空気に息苦しさを覚えていた。明里はすっかりリラックスしており、バーテンダーや常連客と楽しそうに会話を弾ませている。

「あかりちゃん、今日のワンピすごくエロいね」

太いシガーをくわえた中年男が、明里の背中 of の大きく開いたデザインを指して言った。

「でしょ？ 蓮くんに見せるために着てきたの」

明里は蓮の肩に頭を預けながら、男に向かってウインクをする。男は蓮の方を見て、ニヤリと笑った。

「いい彼氏を持って羨ましいね。……でも、ここはシェアする場所だろ？」

その言葉に、蓮はカッとなったが、グラスを強く握ることで怒りを堪えた。明里が「縛らないで」と言ったのは、自分のためでもあるが、結局はこの空間での彼女の自由を保障するための免罪符だったのだ。

しばらくして、男が明里に耳打ちをした。明里は一瞬蓮の方を見て、それから小さく頷いた。

「蓮くん、ちょっと行ってくるね」

明里はグラスを置き、立ち上がった。

「……どこへ？」

「あそこ」

明里は赤いベルベットのカーテン——プレイルームの方を指差した。男が既にカーテンの前で待っている。

「ちょっと遊んでくるだけ。すぐ終わるから」

呆気にとられる蓮を残して、明里は軽い足取りで男の方へ歩いていった。カーテンが揺れ、二人の姿が闇に消える。

(つづく)